様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月２０日現在

機関番号：43926
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20500531
研究課題名（和文）　幼児期における身体的コミュニケーションとしての模倣の有効性

研究課題名（英文）　**Effectiveness of the Imitation as Physical Communication in Early Childhood**

研究代表
鈴木　裕子（SUZUKI YUKO）
名古屋柳城短期大学・教授
研究者番号：40300214

研究成果の概要（和文）：

保育という場において，模倣する子ども，模倣される子ども双方を観察対象として，幼児の身体による模倣の機能を分類し，身体による模倣の果たす役割を実証的に検討した。次いで模倣発現のプロセスに深く関わると考えられる「感性」の働きを考察する手がかりとして，幼児期の感性尺度を開発した。その結果，幼児期の身体による模倣には，他者との身体的なコミュニケーションを活性化させる力，自己理解と他者理解を促す力，独自な表現を導く力があることが認められた。

研究成果の概要（英文）：

The research focused both on children who imitate and children who are imitated in Early Childhood Care and Education. The function of imitation was categorized, and the role of physical imitation was empirically analyzed.　The Scale to Evaluate Young Children's Sensitivities was developed to provide some clues on "KANSEI", sensitivity, which is believed to have strong influence on the development of imitation. The results show that physical imitation in early childhood activates physical communication with others, betters one's understanding of self and others, as well as bring out the ability to express one's self.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	600.000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：保育内容論，幼児の身体表現と身体活動
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学，身体教育学
キーワード：身体による模倣，感性，身体的コミュニケーション，相互行為，保育，尺度作成，事例研究

１．研究開始当初の背景

幼児の身体による模倣への関心は，次世代の活き活きとした子どもたちを育てたいという願いから、「こころとからだの相互作用」に焦点を当て、以来一貫して保育者と協働的に取り組んできた「身体活動性を高めるための介入」や「自由にからだで表現することを支援する身体表現活動」の場での実践や研究から生まれた。

身体活動の場では，平成 13-15 年度科学研究費補助金を受け「幼児の身体活動量の増加と活動意欲の形成に関する研究」を行った。活動量や運動能力の調査から問題点を把握した後，プレイ，リーダー，チャレンジ，ソーシャルの 4 因子で構成される「子どもアクティビティ尺度」を開発した。本尺度の開発からは，他者とのかかわりが，からだとこころの相互作用を活性化させる要素となることが明らかにされた。また，身体による模倣によって，他者とかかわりながら自己を生きるという共同的で流動的な自己形成を拓く力が導かれることが示唆された。

身体表現という場では，「からだとこころ」の動きの一端を「動きとイメージ」と捉え，幼児が身の回りのさまざまな事象をからだや動きを使って表現する際の特徴を捉え，身体表現の特性から導き出された援助の視点を検討した。他者と身体でかかわることの意義が浮かび上がり，幼児においては，他者と身体でかかわる大部分を「模倣，真似る」という行為が占めていることが見えてきた。

一方，わが国の重要課題「教育の改革」の背景には，学力の低下だけでなく，いじめ，不登校，切れる，ひきこもり，自制心や規範意識の不足といった「社会で生きる力」に関わる問題が存在する。これらは他者とのかかわり方の不具合すなわちコミュニケーション能力の不足に端を発している。問題として顕著に現れるのは修学以降さらには青年期以降であるが，乳幼児期に他者とかかわることの基礎がつくられるため，この時期の身体を通したコミュニケーションが円滑に行えるような環境づくりや支援が非常に重要と考えられる。

一方，模倣が知的発達過程を象徴する機能を超えて，様々な領域においても身体的コミュニケーションへと収束される身体の営みや相互行為として関心が拡がっている。しかし，現状ではいずれも論説に留まり，模倣とコミュニケーション両者の関係そのものを研究対象とし，発達に伴う関係性の広がりのなかでの変化を扱った研究は少なく，なかでも幼児期を対象とした研究は見当らない。

以上の研究経過と時代背景に動機づけられ，幼児期の身体を通した他者とのかかわりにおける「身体による模倣」に着目した。

２．研究の目的

本研究では，幼児期において身体的コミュニケーションを豊かに営むことが，他者とかかわる力の獲得にどのような影響を与えるのか，その後の社会で生きる力にどのように繋がるのかという問題提起を基軸にして，幼児の「身体による模倣」に焦点を当て，その機能や役割を明らかにすることを第一の目的とした。

次いで，模倣発現のプロセスに深く関わる「感性」の働きを検討した。感性については，その広さと深さゆえに未だ定義も確立されていない。本研究では特に自己と他者の身体的な関わりのなかでの役割を焦点として検討することとした。

３．研究の方法

研究 1）身体的コミュニケーションとしての模倣に関する論考（文献研究）

：身体による模倣を研究する意義を確かにするために，哲学，人類学，心理学などの領域，その他社会生活の文脈から，模倣に関連する既存の理論を収集し論考した。

研究 2）幼児の身体表現活動における模倣の機能（観察研究）

：愛知県内の幼稚園 3 園，保育園 2 園において，年中 4 歳児・年長 5 歳児の身体表現活動を観察し，事例の質的な考察を行った。それによって発現する模倣の機能を検討し，身体による模倣のパターンを分類した。

研究 3）幼児期の身体による模倣のもたらす豊かさ（調査研究）

：研究 2）で分類した身体表現活動における身体による模倣のパターンが，幼児の日常生活全般において適応できるかを検証するために，愛知県，埼玉県，東京都の幼稚園・保育所の保育者を対象に自由記述式の質問紙調査を依頼し，「模倣の豊かさ」を捉えたエピソードを収集した。その結果，私立幼稚園 18 園（保育者 78 名），公立保育所 53 園（保育者 197 名）私立保育所 1 園（保育者 3 名）公立幼保園 1 園（保育者 2 名）の保育者合計 280 名（園ベースの回収率 69%）の回答を得た。 回答の自由記述からは，524 例（1 人あたりの平均 1.87 例）のエピソードが抽出され，内容の読み取りの分析を行った。

研究 4）幼児期の身体による模倣発現の検証（観察研究）

：研究 3）4）で検討した「身体による模倣パターン」をもとに，保育現場での観察を継続し，各機能発現の量的分析，質的分析から，模倣発現のプロセスを明らかにし，その説明モデルを提示した。2007 年 4 月～2008 年 11 月，兵庫県国立 H 幼稚園に 2 週間に 1 日訪問し，2007 年 4 月～2008 年 3 月は年少 3 歳児クラス，2008 年 4 月～11 月は年中 4 歳児ク

ラスを中心に，保育全般に参与観察者としてかかわった。

研究 5）模倣発現の基盤としての感性のしくみと果たす役割（調査と尺度開発）

：模倣発現のプロセスを，からだとこころを存分に使って自己を発揮し，他者と強烈にやりとりする行為として捉えていくためには，「感性」の働きを考えることが手がかりになるという考えを基軸として，幼児期の感性の内実を検討した。保育者のエピソード記述の読み取りをもとに「感性」の諸相を分類し，その後「幼児期の感性尺度」を開発した。

研究 6）保育・教育現場で模倣を捉える有効性の検証（観察・調査研究）

：模倣の発達を，個体が持つ能力の発達としてではなく，関係性の広がりや変容を捉える視点で遂行するために，子どもにとっての身近な大人としての保育者の模倣を捉える力と感性の豊かさを検討し相互作用の本質を捉えることを試みた。次いで，身体的コミュニケーションを育むための保育者の援助について検討した。

４．研究成果

(1) 身体による模倣に関する論考

幼児期の模倣を身体の相互行為として考察する背景となる知見を俯瞰し，模倣につながる用語や概念の整理を行いながら，身体による模倣が保育という場においてどのような課題を持っているのかを焦点化した。

保育周辺の領域の知見からは，他者との交流のなかで身体が応答しあう現象が様々に確認され，模倣が知的発達過程を象徴する機能だけでなく，乳幼児から成人に至るまで，ひととひとがかかわる身体的なコミュニケーションとしての意義や機能を持っていることが示された。その一方で，模倣を幼児期の子どもの社会生活の主要な行為として尊重する視点が薄いために，幼児期を対象とした研究が不足していることも指摘され，幼児期における身体による模倣を論じる意義が明らかにされた。

(2) 幼児の身体による模倣の機能

幼児の身体による模倣の機能を検討した。身体に強く焦点を当てた身体表現活動の場において発現する模倣の機能を，観察事例から分類し，その分類に対する日常生活全般において発現する模倣機能の適応の是非を，保育者の記述エピソードの解釈から検討した。その結果，身体表現活動において見出された模倣機能は，幼児の日常生活全般にわたる模倣発現の様相に適応することが認められた。そして，身体による模倣機能は，以下の４つに分類され命名された。

身体による模倣機能の類型	
Pattern Ⅰ	行為のはじめのきっかけやタイミングを求める
Pattern Ⅱ	動きをなぞらえたり，やりとりをしたりして楽しむ（状況） （その結果として） ⅰ一緒にできる楽しさの機会が保障される ⅱ同調することで動きが広がる ⅲまねされることで他者に関心を持つ ⅳまねし合うことから自己表現が息づく ⅴ他者と動きでつながることで世界が変わる
Pattern Ⅲ	自分の行為，心情やイメージを意識する
Pattern Ⅵ	自分にないイメージや行為のアイディアを取り込む

それぞれの類型の特徴は，以下のようなキーワードでも示された。

PatternⅠでは，他者とかかわる「きっかけ」（安心感，意欲などをもとに他者とかかわる「きっかけ」を得る）。PatternⅡは，他者との身体的な「一致」（感情の一致，時間的な一致，感覚の一致，イメージの一致などによって，他者と身体的な一致を得る）。PatternⅢは，他者と自己への「意識」（他者と自己の双方を意識する）。PatternⅣは，他者との「取り込み」（他者に沿い，他者から何かを取り込む）

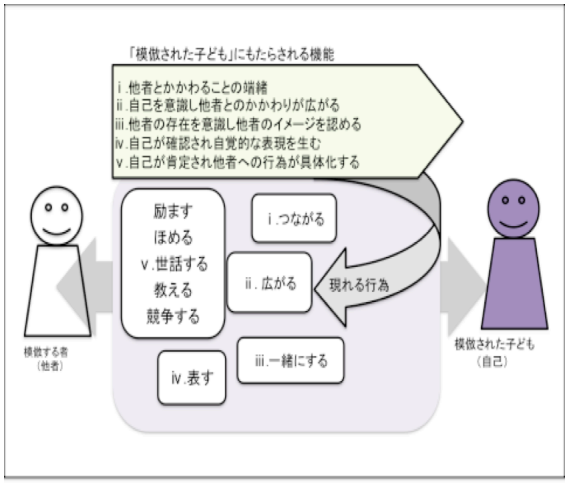
(3)「模倣された子ども」を焦点とした身体による模倣の機能

身体による模倣機能の特徴の考察において，子どもにとって他者にまねされる実相が捉えられ，模倣される側に何かをもたらすからこそ，模倣が相互行為と位置づけられると考えられた。そこで，模倣された子どもにもたらされる機能を，観察事例と保育者の記述エピソードから考察した。

その結果，模倣された子どもにもたらされる機能が，以下の５つに分類された。

ⅰ.他者とかかわることの端緒
ⅱ.自己を意識し他者とのかかわりが広がる
ⅲ.他者の存在を意識し他者のイメージを認める
ⅳ.自己が確認され自覚的な表現を生む
ⅴ.自己が肯定され他者への行為が具体化する

各機能によって，どのような行為が現れるかを図式化した。模倣されることが，他者を通した自己認識を促し，子どもたちにとっての自己理解から他者理解へのプロセスに大きくかかわっていることが示された。



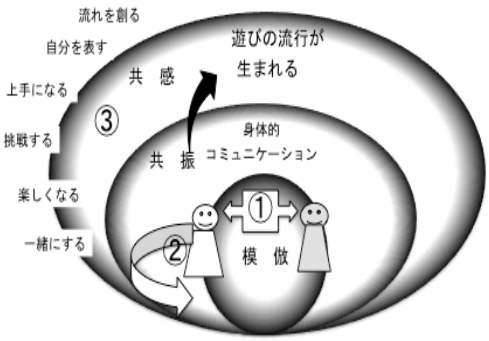
「模倣された子ども」にもたらされる機能とその後に現れる行為

(4) 身体活動場面における身体による模倣の役割

身体による模倣機能の分類と各機能の特徴をもとに，保育における身体活動場面での模倣の果たす役割を実証的に検討した。

その結果，身体による模倣によって，他者との相互行為が活性化する役割が多様に捉えられた。そこでの模倣の役割には，これまで身体活動や運動教育の分野で認められてきた動きの習得過程における有効性とは異なる側面が見出され，他者との相互行為は，身体的なコミュニケーションとしての意義を持つことが示唆された。さらに，身体活動場面において発現する身体的なコミュニケーションとしての模倣は，子ども達の間に，遊びの「流行（はやり，ブーム）」を作り出すことが実証され，保育という場における身体による模倣の有効性が具体的に示された。

身体による模倣によって，他者と身体感覚を共にし，一緒にする，楽しくなる，挑戦する，上手になる，自分を表す，流れを創るという方向へと導かれる。身体による模倣を通して，他者をうかがったり，感じたり，考えたり，情報を理解したりといった一見別々のことを，自己のなかで総合的に働かせ，どこか曖昧な部分を残しながら他者とかかわることを楽しむ。その一連の流れが流行を生む源となっている。以上をイメージモデルとして示した。



①模倣する者（たち）と模倣される子ども（たち）の関係において発現する多様な模倣
②他者の存在に目を向け，自己を認識していく過程
③身体的なコミュニケーションを活発にして（一緒にする，楽しくなる，挑戦する，上手になる，自分を表す，流れをつくる），流行を生み出す過程

身体活動場面における模倣の役割

(5) 身体よる模倣の力

2009 年（平成 22 年）度～2010 年（平成 23 年）度では，それまでに得た模倣する子ども，模倣された子どもにもたらされる機能と役割や，その説明モデルをもとに，他領域での模倣につながる論考を背景として，身体による模倣行為のもつ力について検討した。

幼児期の身体による模倣行為には，身体双方向性のもとで，他者とのほどよい一致を生み出す機能があるという観点から，幼児における身体による模倣の力としての「他者との身体的なコミュニケーションを活性化させる力」「自己理解と他者理解を促す力」「独自な表現を導く力」について論じた。そして，子どもの模倣に対して「まねしてもいいよ」と言える理由は，これらの力への大人の見方に大きくかかわることが示された。

(6) 幼児期の感性尺度の開発

2008 年（平成 21 年）度～2010 年（平成 23 年）度を通して，身体の相互行為に深く関わると考えられる「感性」の働きを検討した。

手続き I では，愛知県他の幼稚園・保育所における保育歴 2 年以上の教諭・保育士を対象に，感性の豊かさを感じさせる子どものエピソードを記述する趣旨の自由記述式質問紙調査を依頼した。回収された自由記述からは，909 例（保育者 1 人あたり平均 3.2 例）のエピソードが抽出された。そのエピソードをもとに，感性の概念を 3 側面 28 要素 64 項目に分類した。3 側面は「感受と交流」「判断と志向」「創出と伝達」と命名された。さらに各側面を支え機能させる営みを，エピソードの読み取りから捉え，共通の要素として抽出し分類した。「感受と交流」の側面が「直感的に捉える」「身体感覚で受け止め反応しようとする」などの 8 要素，「判断と志向」の側面は「感情（喜びなど）が満ち溢れる」「対象を道徳的に判断志向する」など 11 要素,「創出と伝達」の側面は「感情を素直にあらわす」「アイディア豊かにあらわす」「人や場の雰囲気にあわせてあらわす」などの 9 要素，合計 28 要素に分類された。次に，28 要素を，保育者が具体的に観察できる内容に置き換える作業を試みた。収集した保育者のエピソード内容を再度参考にして，各要素を象徴的に表していると考えられる状況と文言を検討し 64 項目を作成した。最終的に 1 要素につき最

適と考えられる1項目または2項目を残し，31の幼児の感性を具体化した項目を選出した。

手続きⅡでは，幼児における感性に関する31項目について，探索的因子分析を行った。2008年6月～8月，全国にある国立および私立大学附属幼稚園35園の園児157名（年長男児39名，年長女児41名，年中男児37名，年中女児40名）を対象に質問紙調査を行った。回答方法は，保育者86名による代理報告形式とした。その結果，3因子26項目が，幼児期の感性に関する項目として抽出された。第Ⅰ因子『独自な感受と創出』には13項目が含まれ，幼児の創造的な営みを表す項目群であった。第Ⅱ因子『能動的な応答』には8項目が含まれ，感情が豊かでやりたがりで，周囲の状況に対して身体が豊かで柔軟に応答していることを捉えた項目群であった。第Ⅲ因子『情緒的・道徳的な共感』は5項目が含まれ，相手に沿って，相手を思う，相手を分かろうとする心情を行動に表した項目群であった。

手続きⅢでは，本尺度の高い信頼性と妥当性が確認された。開発された感性尺度は，幼児の行動から感性の豊かさを捉えるために保育現場において有効な働きをすると考えられた。感性は他者との身体的なコミュニケーションを促進させる力であることが示唆された。

(7)今後の研究の方向性

最後に，本研究で得られた知見の保育への適応可能性を検討し，今後の展望と残された課題を整理した。本研究で得た模倣機能の類型を用いた実証研究によって保育者の援助方法がいっそう具体化できる可能性と，幼児期の感性という観点から身体による模倣を検討するという展望が指摘された。残された課題は，以下の3点にまとめられる。

① 子ども同士の模倣の機能と，対大人への模倣の機能の相違を明確に示すには至らなかった。「模倣される子ども」を焦点とした観察調査と考察が有効であると考え，調査を継続している。

② 身体による模倣行為に対する保育者の有り様と援助方法の探究を課題の1つとしたが，子どもの姿に注目する比重が大きく，援助方策としての体系を得ていない。保育者側からの実証的な考察が必要である。

③ 幼児期の身体による模倣によって得られた力が，どのように持ち越されて生かされるのかという課題に接近することが，引き続きの課題である。発達という視点を加えた保育における実践的な検討が残されている。身体による模倣発現の基盤としての「幼児の感性」を視野に入れた観察を重ねる計画である。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計8件）

鈴木裕子，幼児の感性を具体化する試み：幼児期の感性尺度の開発を手がかりとして，査読有，保育学研究 47-2，2009，132-142，
http://ci.nii.ac.jp/naid/110007522906

鈴木裕子，幼児期における模倣機能の類型化の有効性：幼児の身体表現活動を焦点とした検討，査読有，子ども社会研究 15，2009，123-136，
http://js-cs.jp/0001/b01/15.html

鈴木裕子，幼児の身体活動場面における模倣の役割に関する事例的検討，査読有，発育発達研究 42，2009，24-32，
http://www.jstage.jst.go.jp/article/hatsuhatsu/2009/42/2009_42_24/_article/-char/ja

鈴木裕子，幼児の身体的コミュニケーションにおける模倣の機能，査読有，教育実践学論集 10，2009，57-67，
http://repository.hyogo-u.ac.jp/dspace/handle/10132/2555

鈴木裕子，幼児期における身体による模倣の意味：相互行為としての模倣を焦点として，査読有，人権教育研究 9，2009，26-40，

〔学会発表〕（計6件）

鈴木裕子，「模倣する-模倣される」：幼児における身体による相互行為，日本保育学会第63回大会，2010.5.22，松山東雲女子大学

鈴木裕子，幼児期における感性の果たす役割： 幼児期の感性尺度の開発を手がかりとして，日本保育学会第62回大会，2009.5.16，千葉大学

鈴木裕子，幼児期の身体的な模倣の機能の検討：模倣される子どもを焦点として，日本乳幼児教育学会第18回大会，2008.11.2，大阪キリスト教短期大学

鈴木裕子，幼児の自己表現とそれを受容する視点：模倣行為を焦点として，第9回日本人権教育研究学会研究大会，2008.8.5，兵庫教育大学

〔その他〕

日本保育学会研究奨励賞（論文部門）
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsrec/guide/prize/shoreisho.pdf

６．研究組織

(1)研究代表者

鈴木　裕子（SUZUKI　YUKO）
名古屋柳城短期大学・教授
研究者番号：40300214

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし